

此界也。懸君。...

此界也。懸君。...

此界也。懸君。...

此界也。懸君。...

此界也。懸君。...

漱石全集  
第七卷

明  
暗

昭和四十一年六月二十三日 第一刷發行  
昭和五十年六月九日 第二刷發行

漱石全集 第七卷 明 暗

定價 二千八百圓

著 者 夏 目 漱 石

發 行 者 岩 波 雄 二 郎



發 行 所 株式會社 岩 波 書 店

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

目次

明

暗

三

解

說

六六三

注

解

六九五



明

暗

大正五、五、二六——五、一二、一四



—

「醫者は探りを入れた後で、手術台の上から津田を下した。」

「矢張穴が腸迄續いてゐるんです。此前探つた時は、途中に癩痕の隆起があつたので、つい其所が行き留りだとはかり思つて、あゝ云つたんですが、今日疎通を好くする爲に、其奴をがり／＼掻き落して見ると、まだ奥があるんです」

「さうして夫が腸迄續いてゐるんですか」

「さうです。五分位だと思つてゐたのが約一寸程あるんです」

津田の顔には苦笑の裡に淡く盛り上げられた失望の色が見えた。醫者は白いたぶ／＼した上着の前に両手を組み合はせた儘、一寸首を傾けた。其様子が「御氣の毒ですが事實だから仕方がありません。醫者は自分の職業に對して虚言を吐く譯に行かないんですから」といふ意味に受取れた。

津田は無言の儘帯を締め直して、椅子の脊に投げ掛けられた袴を取り上げながら又醫者の方を向いた。



「腸迄續いてゐるとすると、癒りつこないんですか」

「そんな事はありません」

「患者は活潑にまた無雑作に津田の言葉を否定した。併せて彼の気分をも否定する如くに。

「たゞ今迄の様に穴の掃除ばかりしてゐては駄目なんです。それぢや何時迄経つても肉の上りこはな  
いから、今度は治療法を變へて根本的の手術を一思ひに遣るより外に仕方がありませんね」

「根本的の治療と云ふと」

「切開です。切開して穴と腸と一所にして仕舞ふんです。すると天然自然割かれた面の兩側が癒着し  
て來ますから、まあ本式に癒るやうになるんです」

津田は黙つて點頭いた。彼の傍には南側の窓下に据ゑられた洋卓の上に一台の顯微鏡が載つてゐた。  
醫者と懇意な彼は先刻診察所へ這入つた時、物珍らしさに、それを覗かせて貰つたのである。其時八百  
五十倍の鏡の底に映つたものは、丸で圖に撮影つたやうに鮮やかに見える着色の葡萄狀の細菌であつ  
た。

津田は袴を穿いて仕舞つて、其洋卓の上に置いた皮の紙入を取り上げた時、不圖此細菌の事を思ひ出  
した。すると連想が急に彼の胸を不安にした。診察所を出るべく紙入を懷に収めた彼は既に出ようとし  
て又躊躇した。

「もし結核性のものだとすると、假令今仰しやつた様な根本的な手術をして、細い溝を全部腸の方へ切り開いて仕舞つても癒らないんでせう」

「結核性なら駄目です。夫から夫へと穴を掘つて奥の方へ進んで行くんだから、口元丈治療したつて役にや立ちません」

津田は思はず眉を寄せた。

「私のは結核性ぢやないんですか」

「いえ、結核性ぢやありません」

津田は相手の言葉にどれ程の眞實さがあるかを確かめやうとして、一寸眼を醫者の上に据ゑた。醫者は動かなかつた。

「何うしてそれが分るんですか。たゞの診斷で分るんですか」

「えゝ。診察の様子で分ります」

其時看護婦が津田の後に廻つた患者の名前を室の出口に立つて呼んだ。待ち構へてゐた其患者はすぐ津田の背後に現はれた。津田は早く退却しなければならなくなつた。

「ぢや何時其根本的な手術を遣つて頂けるでせう」

「何時でも。貴方の御都合の好い時で宜う御座んす」

津田は自分の都合を善く考へてから日取を極める事にして室外に出た。

## 二

電車に乗つた時の彼の気分は沈んでゐた。身動きのならない程客の込み合ふ中で、彼は釣革にぶら下りながら只自分の事ばかり考へた。去年の疼痛があり／＼と記憶の舞臺に上つた。白いベッドの上に横へられた無残な自分の姿が明かに見えた。鎖を切つて逃げる事が出来ない時に犬の出すやうな自分の唸り聲が判然聽えた。それから冷たい刃物の光と、それが互に觸れ合ふ音と、最後に突然兩方の肺臓から一度に空氣を搾り出すやうな恐ろしい力の壓迫と、壓された空氣が壓されながらに収縮する事が出来ないために起るとしか思はれない劇しい苦痛とが彼の記憶を襲つた。

彼は不愉快になつた。急に氣を換へて自分の周圍を眺めた。周圍のものは彼の存在にすら氣が付かずにみんな澄ましてゐた。彼は又考へつゞけた。

「何うしてあんな苦しい目に會つたんだらう」

荒川堤へ花見に行つた歸り途から何等の豫告なしに突發した當時の疼痛に就いて、彼は全くの盲目漢であつた。其原因はあらゆる想像の外にあつた。不思議といふよりも寧ろ恐ろしかつた。

「此肉體はいつ何時どんな變に會はないとも限らない。それどころか、今現に何んな變が此肉體のう

ちに起りつゝあるかも知れない。さうして自分は全く知らずにゐる。恐ろしい事だ」

此所迄働らいて来た彼の頭はそこで留まる事が出来なかつた。どつと後から突き落すやうな勢で、彼を前の方に押し遣つた。突然彼は心の中で叫んだ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう變るかわからない。さうして其變る所を己は見ただのだ」

彼は思はず唇を固く結んで、恰も自尊心を傷けられた人のやうな眼を彼の周圍に向けた。けれども彼の心のうちに何事が起りつゝあるかを丸で知らない車中の乗客は、彼の眼遣に對して少しの注意も拂はなかつた。

彼の頭は彼の乗つてゐる電車のやうに、自分自身の軌道の上を走つて前へ進む丈であつた。彼は二三日前ある友達から聞いたポアンカレーの話を思ひ出した。彼の爲に「偶然」の意味を説明して呉れた其友達は彼に向つて斯う云つた。

「だから君、普通世間で偶然だといふ、所謂偶然の出来事といふのは、ポアンカレーの説によると、原因があまりに複雑過ぎて一寸見當が付かない時に云ふのだね。ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精蟲の配合が必要で、其必要な配合が出来得るためには、又何んな條件が必要であつたかと考へて見ると、殆んど想像が付かないだらう」

彼は友達の言葉を、單に與へられた新らしい知識の斷片として聞き流す譯に行かなかつた。彼はそれをびたりと自分の身の上に當て箴めて考へた。すると暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押し遣つたり、前に進むべき彼を後ろに引き戻したりするやうに思へた。しかも彼はついぞ今迄自分の行動に就いて他から牽制を受けた覺がなかつた。爲る事はみんな自分の力で爲、言ふ事は悉く自分の力で行つたに相違なかつた。

「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう。それは自分で行かうと思つたから行つたに違ない。然し何うしても彼所へ嫁に行く筈ではなかつたのに。さうして此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう。それも己が貰はうと思つたからこそ結婚が成立したに違ない。然し己は未だ嘗て彼の女を貰はうとは思つてゐなかつたのに。偶然？ ポアンカレーの所謂複雑の極致？ 何だか解らない」

彼は電車を降りて考へながら宅の方へ歩いて行つた。

### 三

角を曲つて細い小路へ這入つた時、津田はわが門前に立つてゐる細君の姿を認めた。其細君は此方を見てゐた。然し津田の影が曲り角から出るや否や、すぐ正面の方へ向き直つた。さうして白い纖い手を額の所へ翳す様にあてがつて何か見上げる風をした。彼女は津田が自分のすぐ傍へ寄つて來る迄其態度

を改めなかつた。

「おい何を見てゐるんだ」

細君は津田の聲を聞くと左も驚ろいた様に急に此方を振り向いた。

「あゝ吃驚した。——御歸り遊ばせ」

同時に細君は自分の有つてゐるあらゆる眼の輝きを集めて一度に夫の上に注ぎ掛けた。それから心持腰を曲めて軽い會釋をした。

半ば細君の嬌態に應じやうとした津田は半ば逡巡して立ち留まつた。

「そんな所に立つて何をしてゐるんだ」

「待つてたのよ。御歸りを」

「だつて何か一生懸命に見てゐたぢやないか」

「えゝ。あれ雀よ。雀が御向ふの宅の二階の庇に巢を食つてゐるんでせう」

津田は一寸向ふの宅の屋根を見上げた。然し其所には雀らしいものゝ影も見えなかつた。細君はすぐ手を夫の前に出した。

「何だい」

「洋杖」

津田は始めて気が付いた様に自分の持つてゐる洋杖を細君に渡した。それを受取つた彼女は又自分で玄關の格子戸を開けて夫を先へ入れた。それから自分も夫の後に跟いて沓脱から上つた。

夫に着物を脱ぎ換へさせた彼女は津田が火鉢の前に坐るか坐らないうちに、また勝手の方から石鹵入を手拭に包んで持つて出た。

「一寸今のうち一風呂浴びて入らつしやい。また其所へ坐り込むと臆劫になるから」

津田は仕方なしに手を出して手拭を受取つた。然しすぐ立たうとはしなかつた。

「湯は今日は已めにしようかしら」

「何故。——薩張りするから行つて入らつしやいよ。歸るとすぐ御飯にして上げますから」

津田は仕方なしに又立ち上つた。室を出る時、彼は一寸細君の方を振り返つた。

「今日歸りに小林さんへ寄つて診て貰つて来たよ」

「さう。さうして何うなの、診察の結果は。大方もう癒つてるんでせう」

「所が癒らない。愈厄介な事になつちまつた」

津田は斯う云つたなり、後を聞きながら細君の質問を聞き捨てにして表へ出た。

同じ話題が再び夫婦の間に戻つて来たのは晩食が済んで津田がまだ自分の室へ引き取らない宵の口であつた。

「厭ね、切るなんて、怖くつて。今迄の様にそつとして置いたつて宜かないの」

「矢張醫者の方から云ふと此儘ぢや危険なんだらうね」

「だけど厭だわ、貴方。もし切り損ないでもすると」

細君は濃い恰好の好い眉を心持寄せて夫を見た。津田は取り合はずに笑つてゐた。すると細君が突然氣が付いたやうに訊いた。

「もし手術をするとすれば、又日曜でなくつちや不可いでせう」

細君には此次の日曜に夫と共に親類から誘はれて芝居見物に行く約束があつた。

「まだ席を取つてないんだから構やしないさ、斷わつたつて」

「でも夫や悪いわ、貴方。切角親切にあゝ云つて呉れるものを斷つちや」

「悪かないよ。相當の事情があつて斷わるんなら」

「でもあたし行きたいんですもの」

「御前は行きたければ御出な」

「だから貴方も入らつしやいな、ね。御厭？」

津田は細君の顔を見て苦笑を洩らした。



細君は色の白い女であつた。その所爲で形の好い彼女の眉が一際引立つて見えた。彼女はまた癖のやうに能く其眉を動かした。惜い事に彼女の眼は細過ぎた。御負に愛嬌のない一重瞼であつた。けれども其一重瞼の中に輝やく瞳子は漆黒であつた。だから非常に能く働らいた。或時は専横と云つてもいゝ位に表情を恣まゝにした。津田は我知らず此小さい眼から出る光に牽き付けられる事があつた。さうして又突然何の原因もなしに其光から跳ね返される事もないではなかつた。

彼が不圖眼を上げて細君を見た時、彼は利那的に彼女の眼に宿る一種の怪しい力を感じた。それは今迄彼女の口にしつゝあつた甘い言葉とは全く釣り合はない妙な輝やきであつた。相手の言葉に對して返事をしやうとした彼の心の作用が此眼付の爲に一寸遮斷された。すると彼女はすぐ美しく歯を出して微笑した。同時に眼の表情が述方もなく消えた。

「嘘よ。あたし芝居なんか行かなくつても可いのよ。今のはたゞ甘つたれたのよ」  
 黙つた津田は猶しばらく細君から眼を放さなかつた。

「何だつてそんな六づかしい顔をして、あたしを御覽になるの。——芝居はもう已めるから、此次の日曜に小林さんに行つて手術を受けて入らつしやい。それで好いでせう。岡本へは二三日中に端書を出